

## 江戸時代 女性二人で 150 日、3100 km歩いた今野於以登

八柳 修之



庶民の生活に余裕ができ始めた江戸時代中期以降、天皇家を祀る伊勢神宮にお参りする伊勢参りが盛んになった。これを後押ししたのは、「伊勢講」という積立金による相互扶助と「御師」（おんし）と呼ばれる伊勢神宮の神職兼案内人であった。「講」は伊勢参りをしたい人々が毎月僅かずつのお金を積立て、この積立金を使って、数人ずつ抽選あるいは順番に伊勢参りに出かけたのである。名目は信仰の旅であるが実質は遊興であった。御師は現代版、旅行社のガイドで旅行の世話をした。この講のツアーに参加したのは多くは男性で、女性が占める割合はわずか4~5%前後、女性の旅姿は20人~

25人に1人見られる位だったという。「江戸の女子旅」（谷釜尋徳著）の調査によると女性の旅日記22著のうち、女性が旅をした最も長い記録は今野於以登（おいと）が書いた「参宮道中諸用記」である。

今野於以登は秋田県本荘（現由利本荘市）、出戸郷の酒造業を営む名家の出戻り、連れは船問屋佐藤某の妻、いずれも財力に困らない女性、そして、従者、荷物持ちの男2名、それ以上のことは分っていない。二人は文久2年（1862）8月22日に旅たち同年12月24日、本荘に戻った。この間150日、滞在日を除く一日の平均移動距離は6~7里ほど、全行程780里、3,100kmである。松尾芭蕉の「奥の細道」の全行程は450里であるから、その長さが想像できよう。



奥の細道といえば、芭蕉が親知らず・子知らずの難所を越えた市振という宿で、伊勢参りをするという遊女二人と同宿することになった。遊女の所定めぬ情けない境遇の愚痴話を聞いているうちに、翌朝、旅立にあたって、道中の心細さ、不安で同行させていただきたいと涙を流して懇願され、同行することとなったのだった。一振の関所は北陸路の中で取り調べが厳しかったようだ。当時、「お陰参り」といって子供が親、奉公人などが主人に無断で伊勢参りしても罰せらることはなかった。果たしてこの遊女、雇主の所に帰ったことであろうか。曾良に昨夜のことを話したら「一つ家に遊女も寝たり萩と月」（曾良）と一句。

さて、780里もの道中、於以登は各所の名所など見たが忙しかったのか、記述は少ないが、こまめに支出簿をつけており、この方は学術的な価値があるようだ。 先ず、歩いたルートを見て見よう。

文久2年（1862）8月22日（陽暦9月15日）、本荘を出発、越後の高田から信州善光寺にお参りし、高田に戻り海岸線を西へ。富山から金沢、福井永平寺に参拝。京都でも各所のお寺を拝観し、夜船で大阪へ。山陽道を岡山まで。船で丸亀に渡り金毘羅詣をし、再び山陽道を逆行して大阪へ。高野山に登ってから、奈良を見物。伊勢参宮を果たす。この後、伊勢参宮道を桑名から東海道を下り、鎌倉、江ノ島を見物し江戸へ、江戸では濃密な観光をし、日光見物、奥州街道を北上、白河、福島、山形、吹雪のなか峠をこえて横手へ。橇と馬を乗り継いで、本荘に戻ったのは12月14日（陽暦では翌年の2月12日）であった。

於以登は日本海側のルートをとって、京、金毘羅山、奈良、伊勢、帰途は東海道東下りをして帰省してい

が、金森敦子は、通行手形を持っていても、関所は「入り鉄砲に出女」を監視することで、幕府は武器類の江戸への持ち込みと、江戸に人質として住ませた諸大名の妻女が出ることを厳しく監視したため、比較的取り調べが緩い「東下り」のルートをとったのでないかとしている。特に箱根の関所は女性には取り調べが厳しかったことで知られている。於以登の書いた「諸用記」には「にわかには思い立って」旅立ったとあるから、関所女手形を用意する時間があったとは思えない。(金森敦子) 裏道を金で解決したかもしれない。於以登は箱根関所をどうして通過できたのか。「11月15日(陽暦1月4日)、これより箱根峠に掛かり、馬駕籠頼む。252文 三島より箱根まで馬代。金1歩2朱 同所より小田原まで駕籠。330文 箱根より小田原まで荷物馬 100文 御関所案内」、つまり於以登は三島から小田原までの通しの駕籠を雇い、荷物は馬に乗せて箱根で継がせて小田原までは運んだのである。関所に懇意な旅籠に心づけを渡して、調べはすでに済ませていることを関所へ報告してもらおうと、駕籠から降りなくても通ることができたのである。これを旅籠断りといったそうだ。

11月16日 平塚泊 酒匂川はこの期間、年貢米を運ぶため仮橋が架かり無賃

11月17日 遊行寺には参拝せず、鎌倉へ。鎌倉で何を見たか記されていない。

11月18日 鎌倉発 人を頼んで横浜を案内してもらおう。横浜で帯3本、腰帯2本、皿10枚購入。



於以登と船問屋佐藤某の妻との150日、780里に及ぶ旅の家計簿は学術的に価値があるようだ。これを集計した「江戸の女子旅」の著者、谷釜尋徳によると、かかった費用総額30両4054文。現在価値にして900万円以上であった。

内訳をみると割合の高い順に宿泊費、46.9%(一泊二食付き)422万円、一日当たり28,000円)。次いで寺社参拝関係費(賽銭、拝観料、奉納など)19.8%、178万円と高額になっているのは善光寺や伊勢神宮には高額の奉納したためである。飲食代66万円、馬、船、駕籠、川越等の交通費44万円、人足、案内人等費用32万円は必要経費であるが、お土産代が四番目57万円となっているのは於以登が各地の名産品や記念品を各地で買い求めたからである。その品々には箸、箱、備前焼の徳利な

などの名産工芸品、真綿、袖口、手拭、帷子など。購入頻度が高かったのは有名神社仏閣の土産物や街道の店舗で販売している薬品類。寺社ではお守り、数珠、丸薬、仙人丸、赤玉薬など各地に伝わる薬を頻繁に買い求めている。また各地で訪問先の贈答用の菓子を購入している。とくに江戸ではお土産の贈答用の菓子を多数購入している。

於以登等は道中での費用や荷物をどう持ち歩いたのであろうか。身の回りの必要品は従者に担がせ、挿図に見られるよう身ひとつで歩いている。元禄期(1688~1704)頃から貨幣経済は農村にも行き渡り、金銭を払って物を買えるようになり、さらに為替が発達し、在地から旅先への送金も可能となり、旅費の全額を持ち歩く必要がなくなった。また荷物の運搬業が発達し、有名神社仏閣や観光地ではお土産物の故郷への発送が可能となり、予め大都市の宿泊先に大きな荷物を送っておくことが出来ていた。これで従者さえいれば女子旅も可能となっていた。於以登は道中で頻繁に両替している。両替の回数は70回を超え、ほぼ二日に一回のペース。両替手数料は少額であったが、最終的には手数料は合計1,341文(63

万円) になっていた。

於以登はまた、道中、歩き古した草履代も細目に記録している。於以登たちは 151 日間で合計 164 足の草鞋を購入している。購入回数は 80 回。江戸など長期の逗留中は草履を購入している。逗留期間を除く徒歩移動日の 120 日間で見ると、草鞋購入の回数は 78 回。計算上、37.7 km に一回のペース、大体、40 km 弱で履き替えており草鞋の耐久性を示している。草鞋は宿場や街道筋の茶屋でも売っており、履き古した草鞋を捨てる専用の集積所があり、近隣の農家が持ち帰り、解体し新しい草鞋を編み上げる材料としていた。エコであった。(谷釜尋徳「歩く江戸の旅人たち」)

於以登が故郷の本荘に戻って 6 年後の慶応 4 年 (1868) 4 月、討幕軍が江戸に入城。その年の 9 月 8 日に明治と改元された。明治 2 年 3 月、箱根、新居、碓氷、木曾福島等の関所は完全に廃止され、女性の旅はどこに行こうと自由になったのである。

参考・引用図書：金森敦子著 関所抜け江戸の女たちの冒険

谷釜尋徳著 江戸の女子旅 晃洋書房

新しい歴史教科書 扶桑社

追記：81 歳の情熱 80 日世界一周 (2023 年 4 月 27 日 朝日夕刊記事)

80 歳になったら、80 日間世界一周旅行をしたい。――小説「80 日間世界一周」にちなんだ大冒険に、米テキサス州在住の 81 歳の女性 2 人が挑み実現させた。訪れた国は、日本、南極を含む、7 大大陸の 18 の国と地域。テキサス州の医師サンディ・ヘイゼリックさんと写真家のエンリー・ハンビーさん。宿泊費の予算は一日 33 ドル (約 4500 円) であった。 以上